

2021/09/12

『重荷を負う者、わたしのところに来なさい』 マタイ 11 章 28 節

■なぜ神のもとに来なかったのか

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28)

多くの人は、それぞれ自分が抱えている心配ごとを「重荷」という言葉に置き換えて、この御言葉を理解しています。もちろん、イエス様は私たちのすべてを助けてくださいますから、その理解で間違いはありません。しかし、この言葉が語られている場面を見ると、イエス様はどのようなものを指して「重荷」と言っておられるのか、もう少し具体的な意味を知ることができます。

「それから、イエスは、数々の力あるわざの行われた町々が悔い改めなかったので、責め始められた。」(マタイ 11:20)

イエス様は、町々が悔い改めなかったことを受けて、「重荷を負っている人」と呼び掛けておられるのです。

この「悔い改める」という言葉ですが、新約聖書で「悔い改める」と訳されている言葉のほとんどは「メタノエオー」というギリシャ語で、「向きを変える」という意味です。そこには、「悔い改める」という言葉に含まれる「反省する」という意味合いはありません。ですから、本来、この「悔い改める」という訳は、誤解を招くため不適切です。ルターが最初にこのことを指摘し、その後も多くの人がこの訳には問題があるとしながらも、今も伝統的に「悔い改める」という言葉が使われていますので、注意が必要です。

この「悔い改めなかった」という箇所を正確に訳すなら、「神のもとに来ようとはしなかった」ということになります。せっかく神様が多くのわざをおこなったのに、彼らが神のもとにこようとしなかったので、イエス様は彼らに向かって語り始めたのです。

「そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」

(マタイ 11:25-26)

しかし、この時、イエス様はある出来事に感動し、父なる神をほめたたえました。それは、賢い大人たちは来なかったけれど、幼子たちは神のもとに来たということです。

なぜ大人たちは来ようとしなかったのでしょうか。それが、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」という言葉に表されています。つまり、大人たちが来ない理由は、重荷があるからだということです。神と私たちの間をふさいでいる「重荷」とはいったい何でしょうか。

■イエス様が語った「重荷」とは

1. 生活苦？

「重荷」というと、多くの人には仕事の大変さや生活苦を思い浮かべるでしょう。もちろんイエス様は私たちの生活苦を心にかけ、助けてくださいます。しかし、ここでの重荷は、そのことではありません。私たちは生活が苦しいから神のもとに行けないのでしょうか。仕事がつらいから神のもとに行けないのでしょうか。そうではないからです。

イエス様の弟子たちのことを考えてみましょう。ペテロは生活のために漁師をしていましたし、パウロは生活のために天幕張りをしていました。今日も働きながら牧会をしておられる先生が大勢おられます。もし神様が、生活苦を保証してくださるといふなら、そのようなことはないはずです。つまり、生活苦が神様と私たちの隔ての壁になっているわけではないのです。

2. 病気？

では、病気はどうでしょうか。確かにイエス様は私たちの病気をいやしてくださいます。しかし、パウロは3度祈っても自身の病気はいやされなかったと告白しています。

私たちが病気を恐れるのは死を恐れるからです。神に祈ったら死はなくなるのか、そんなことはありません。ですから、ここで言っているのは、病気のことではないのだとわかります。病気だから神のもとに行けないということはありません。

重荷とは、私たちが神のもとに行くことを妨げているもののことです。神様が「来なさい」というのに、重荷のせいで行けないもののことです。ですから、重荷とは、生活苦でも病気でもありません。

3. 人間関係の問題？

「重荷」と聞いて、人間関係の困難を想像する人も、大勢いるでしょう。確かに精神的な苦しみの大半は人間関係によるものです。この問題も、もちろん神様は助けてくださいます。しかし、聖書は、イエスのもとに行けば行くほど、迫害が起きるとも教えています。つまり、人間関係の苦しきは、神との隔ての壁とはなりません。ですから、神様が取り除いてくださる重荷は、人間関係の苦しきでもありません。

4. 罪？

伝統的な解釈として、神と私たちの間を妨げているもの、それは罪であるといわれています。

す。イエス様は確かに罪を取り除くために来てくださいました。しかし、イエス様のもとに行って罪を下ろそうとする人は、それがそんなに簡単なことではないと気づくでしょう。なぜなら、私たちは、神に近づけば近づくほど罪深い自分に気づいてしまうからです。神は、悪を心に思うだけでも罪だと言われました。そうすると、罪の重荷を下ろせるどころか、ますます罪に気づく結果になり、どうにもならない自分に気づいてしまいます。

つまり、イエス様がここで教えたことは、あなたが罪を下ろすことを妨げているものを取り除いてあげようということなのです。

■その重荷とは律法です

当時は、きよくない者は神に近づくことができないという教えにより、礼拝の前にきよめる儀式がたくさんありました。これが律法です。その結果、律法によって神に近づこうとするため、神に近づくことが重荷になってしまったのです。クリスチャンはこうあるべきである、こうでなければならぬという律法を背負ってしまうと、神様に近づきたくても、なかなか神に近づくことができません。イエス様は、その重荷となっている律法を取り除くから、私に近づきなさいと言っておられるのです。

従来 of 律法という方式では神に近づけなかったあなたの重荷になっている律法を、今廃棄するとイエス様は語ってくださったのです。

■現代における律法

今の私たちにとっての律法は、「ねばならない」という型式です。誰もが「ねばならない」という型式を持って生きており、これがすべての悪の根になっています。戦争や憎しみが生まれるのも、すべて「ねばならない」という律法のせいです。正確には、律法には、罪の律法と神の律法がありますが、ここで問題にしているのは、罪の律法のことです。

たとえば、親から「一番になりなさい」と言われた子どもは、「一番にならなければならない」という律法を持つようになり、一番になれなければつらく感じます。しかし、実際に一番になることができる人はわずかです。こうして自分はだめだと判定するようになります。ゆとり教育の時代になると、今度は「自分らしく生きなさい」という律法が与えられるようになりました。その結果、自分らしさや自分のやりたいことがわからないと、自分はだめだと思ひ込み、苦しくなってしまうのです。こういう律法を、私たちは小さいころからたくさん持っています。結婚すると、「妻はこうあるべきだ」「夫はこうあるべきだ」という律法が生まれます。夫婦喧嘩の大半は律法によるものです。

私たちは多くの律法を持ち、自分の律法に合わない人を見ると腹が立ちます。その頂点が戦争です。互いの律法を押し付け合って、武力行使に至るのです。

つまり、私たちは律法に支配され、律法に苦しんでいます。これが私たちの重荷です。人と人との間に律法を置き、律法によって相手をいい人か悪い人か判断し、相手に近づくことをしません。神に対しても同じことで、常に律法があるため、近づくことができないのです。子どもたちが神のもとに来ることができたのは、大人に比べて律法が少ないからです。だから、素直に来ることができるのです。

そこでイエス様は、私たちが神のもとに行くことができるように、重荷となっている律法を下ろしてあげようと言ってくくださったのです。

「ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」（エペソ 2:15）

パウロはローマ人への手紙の中で、律法が敵意を招くと言っています。つまり、人に怒りを覚えるのは、律法が原因だということです。これが愛するというのを妨げる隔ての壁です。律法が重荷となって、神にも人にも近づくことを妨げ、神を愛することも人を愛することもできなくさせているのです。

■なぜ人は律法を持っているのか

なぜ私たちは律法を持ってしまっているのでしょうか。

心理学や哲学といった学問によると、私たちが律法を持つのは「制約」が原因であると言われています。「制約」とは「有限性」つまり「死」のことです。人生に終わりがあるということが、それまでに結果を出すように要求してくるわけです。あなたは何のために生きているのか、何のための人生か、死ぬまでに結果を出すように要求され、私たちは「ねばならない」という律法を持つのです。

心理学や哲学がこれらのことを解明したのは、20世紀になってからのことです。しかし、聖書は初めからそのことを教えています。聖書は、私たちは死の恐怖の奴隷であると言っています。つまり、誰もが死の恐怖を持っているため、「ねばならない」という律法を持つようになり、不安を覚えるようになったということです。不安は目に見える安心を求めます。今、コロナで人々が不安に陥っているのは、その先に死があるからです。そして、その不安によって、ワクチンや薬といった見える安心を求めます。

不安というものは、必ず見える安心を求めさせます。見える安心の中で、一番強力な安心は、人の愛です。

なぜ赤ちゃんは泣くのでしょうか。それは、死の恐怖を感じるからです。そんな赤ちゃんも、お母さんに抱っこされ微笑んでもらって泣き止みます。自分は愛されていると知り、安心を覚えるのです。人は、愛されている自分を知ることによって安心を求めてきました。だから、必死になって愛されようとして生きています。

ある心理学者は、人間の行動の動機は、愛されたいという承認欲求が100%だと言いました。私たちは不安のため、人から良く思われたいと願い、人が自分をどう思うかを気にします。この不安は死から来ているのです。

人から良く思われるためには、相手の期待に応える必要があります。こうやって律法を持つのです。この世界で律法を持たないことはできません。このようにして、神のことよりも人のことを思ってしまう、これが死の力なのです。ある時イエス様はペテロに「さがれ、サタン」と言いました。その理由を、イエス様はペテロに「あなたは、神のことを思わないで

人のことを思っている」と告げておられます。

死の力、律法によって、見える安心に目が向くようにさせられ、神のことよりも人のことを優先してしまうのです。この「神から目がそれること」が罪です。だから、「死のとげは罪」と聖書は教えているのです。

死によって、誰もが、神ではなく人のことを思う生き方になってしまいました。死が私たちを罪人にしました。そして、その罪の力は律法なのです。罪が私たちに律法を持たせて、苦しめているのです。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」（I コリント 15:56）

私たちが生活で苦しみを覚えたり、病気で苦しみを覚えたり、人間関係で苦しみを覚えたり、罪で苦しみを覚えたりするのは、すべて律法のせいなのです。「健康でなければならない」という律法によって、病気の自分はダメだと思えます。「生活は豊かでなければならない」という律法によって、貧しいのはダメだと思ってしまう。人間関係はうまくやるべきだという律法によって、関係が築けないとだめだと思ってしまう。罪の動力源である「怒り」も、律法によって生まれたものです。律法が罪の力であり、すべての苦しみの原因なのです。

それが私たちと神様、人と人との間の壁になっているのです。これが、イエス様が言われた「重荷」です。「その『重荷』を私が下ろしてあげるから、私のところに来なさい」とイエス様は言われたのです。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）

イエス様が「律法を負ったまま来なさい」と言っているのは、「何も持たずに私のところに来なさい」という意味です。律法を捨てるということは、成功も失敗もすべて捨てるということです。そうして、私のくびきを負うようにとイエス様は言われました。

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ 11:29-30）

イエス様が私たちに与えたくびきとは、十字架の愛です。その愛は、私たちを無条件で受け入れる愛です。律法は必要ない、行いも必要ない、あなたの過去の成功も失敗もすべて置いてきなさい——、イエス様があなたに背負ってもらいたいくびきは、この全き愛なのです。

十字架の愛は、私たちが罪人であることとは関係なく、私たちに示されました。その神の愛を受け取ることが私たちのくびきです。イエス様が「私のくびきは負いやすい」と言われたのは、条件をつけないからです。そのくびきを背負うことができるようになれば、あなたは律法から解放されるのです。

イエス様のたとえ話に登場する放蕩息子は、なかなかお父さんのもとに帰れませんでした。それは、こんな自分はダメだという律法を持っていたからです。だから、愛されるはずがないと思い込んでいたのです。しかし、いよいよ食べるものがなくなった時、彼は、お父さんのもとに帰って罰を受けようと決心して戻りました。お父さんはこの息子を抱きしめ、そのまま受け入れました。そして息子は本当の意味で自由になりました。

何も持たず、ただ神のもとに進むとき、あなたは十字架の愛で抱きしめられるのです。それがあなたの隔ての壁を壊し、律法から解放してくれます。